

公私の境目

東京大学 特任教授・建築学
松村 秀一
Shuichi Matsumura

熊本へ

私のように二十世紀の半ば過ぎに生まれた者は、ついつい「未来の」という意味で「二十一世紀の」という言い方をしてしまうことがある。実際、二十世紀の間はずっとそれを通して生きてきたのだから、癖になっていて抜けきらないのだ。しかし気付いてみると、大学の三年生にはもう二十一世紀生まれの人がいる。うっかり「二十一世紀の」などと言うと過去のことだと思ってしまう人もいて不思議はない。それでも私のような年配者にとって「二十一世紀」に代わる適当な言葉はいまだに見つからない。

そんな調子でいるものだから、二十一世紀になってから始めたものを「最近始めたもの」と思い続けていて、気付いてみたらもう二〇年近く経っていたという仕事もいくつもある。(一社)住宅生産団体連合会の「住宅・すまいWeb」というサイトで続けている「ライフスタイルとすまい」というコーナー(*)もその

一つだ。人の暮らす環境を評価する視点として新たに「居方」という概念を提示したことで知られる近畿大学教授の鈴木毅さん、そして私の研究室のOBで金沢工業大学教授の佐藤考一さんと一緒に、新しいライフスタイルと関係ありそうな方々にお話を伺ってきた。気付いてみた

ら二〇年近く、六〇人程の方々に話を伺い、その内容を先のサイトにアップしてきた。今年、鈴木さんが面白そうな人を何人か見つけたと言うので、その人たちのいる熊本に出向くことになった。

南阿蘇鉄道の駅舎たち

先ず鈴木さんに連れて行ってもらったのは、南阿蘇鉄道の駅舎。この鉄道の駅舎群は、民間の方に任されているいろいろな使われ方をしているそうだが、その内の二つにお邪魔した。一つは長陽駅。もう一つは南

阿蘇水の生まれる里白水高原駅である。

先ずは長陽駅。この築一〇〇年程の木造駅舎を管理しているのは久永操さん。もう一〇年以上にわたって、地元の人に愛されるこの駅舎で「久永屋」というシフォンケーキならぬ「資本ケーキ」屋さんを営んでいる。全国でも少しは知られる久永さんの駅舎「ケーキ屋さん」には、遠くからもお客さんがやって来る。

夕暮れ時に伺って、ホームに置かれた地元の大工さん作の椅子に座って久永さんとお話したが、四方を見回してみても、素晴らしい景観の中にいることに気付かされた。長くアメリカで暮らし、少し働いたことのあるIT企業の自由な雰囲気が入っていたので、日本に帰国して東京のIT企業に勤めてみたら、職場環境がアメリカのそれとは全くの別物。とても続けられずに親御さんの住んでいた南阿蘇に越してきて、この雄大で美しい景色の中で暮らしたいと思われたらしい。あつという間に十数年。今この駅舎は自身の大事な場所であり、そして地元の方々



にとって大事な場所でもある。

一方、南阿蘇水の生まれる里白水高原駅の方は比較的新しい木造駅舎で、管理されているのは中尾友治さんと恵美さんご夫妻。恵美さんが大の好きというところで、駅舎を「ひなた文庫」という本屋さんにしている。誰でも好きな本を手にとって読んでくれるという、ゆるい感じの本屋さん。リングボックスにして積み上げたその空間は駅の待合室も兼ねている。友治さんは

「開かれた居間」と称していた。

新築のお風呂屋さん

最後に訪ねたのは熊本市内。地震被害の大きかったマンションを出て、近くに木造の家を建てた黒岩祐樹さんとそのご家族に会うためだ。黒岩さんの家は少し変わっていて、一階が公衆浴場になっている。今時新築の風呂屋というのは珍しいと思うが、別に黒岩さんの家業ではな

い。黒岩さんは夫婦で建築構造設計事務所を営んでいる。では一体なぜ一階が風呂屋なのか。

地震の後で一番困ったのがお風呂だった。地域に一つこういう風呂屋があれば、災害時にきつと役立つと思つたと黒岩さんは言う。それにこの地域には結構空き家があつて、歩いて行ける場所に風呂屋があれば、その空き家に風呂がなくとも、そこに工費をかけることなく、移住者を受け入れられたり、まち宿として利用したりすることができ、そのことが地域の活性化につながるというお考えもあったとのこと。ちなみにこの住宅の設計者は東京大学土木工学科卒業の建築家西村浩さん。

さて、鈴木さんに連れて行ってもらった二軒の駅舎と一軒の家。これまで空間的に明確に分けて捉えられてきた「公」と「私」が、自然な感覚で混じり合う、二十世紀アタマの筆者にとっては優れて二十一世紀的な人と場所の関係であった。間違いない、二十一世紀は二十世紀よりも進んでいる。